彷徨千里

紅軍に入った皇軍兵士の手記

国田脩

「……私は生きています。生きぬいて、十八年ぶりにやっと故郷に帰りつきました。女房や子どもを連れて……。この村で生れ育った幼な友達や多くの先輩たちが、戦場から〝帰らぬ人〟となったと聞きました。この方々の死を無駄にしないためにも、この私の命を平和のために役立たせたいと考えます」

昭和三三年四月二六日、舞鶴から故郷の兵庫県加西郡西在田小学校前に着いた私は、出迎えの村人たちに、このように挨拶した。

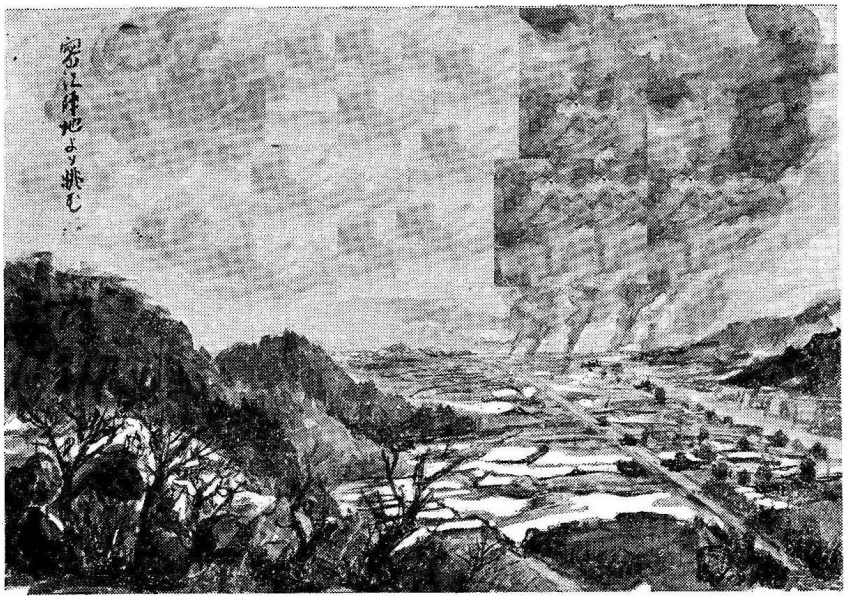
その瞬間、私の脳裡に、まる十八年前の光景がよみがえってきた。同じ場所から、日の丸の旗をふり、万歳、万歳の声で私を送り出してくれた一〇〇人近くの村人と六〇〇人の小学生の顔と姿が……。私は「生きている」喜びをあらためて噛みしめるのであった。

大月書店

国田脩

彷徨千里

紅軍に入った皇軍兵士の手記



大月書店

国田（くにた） 脩（おさむ）

1925年　兵庫県に生まれる．
1940年　満蒙開拓青少年義勇軍に参加，旧満洲に渡る．
1944年　現地で関東軍に入営，翌年ソ連参戦を迎える．戦後も中国にとどまり，中国革命に参加．
1958年　帰国．21年間『兵庫民報』記者・編集長をつとめる．

彷徨千里（ほうこうせんり）——紅軍に入った皇軍兵士の手記

1985年8月15日第1刷発行
1985年10月25日第3刷発行

定価1500円

著　者© 国　田　　脩
発行者　平　　智　享

〒113 東京都文京区本郷2-11-9

発行所　株式会社　大　月　書　店　　印刷　三晃印刷
製本　中條製本

電話（営業）813-4651（編集）814-2931／振替東京3-16387

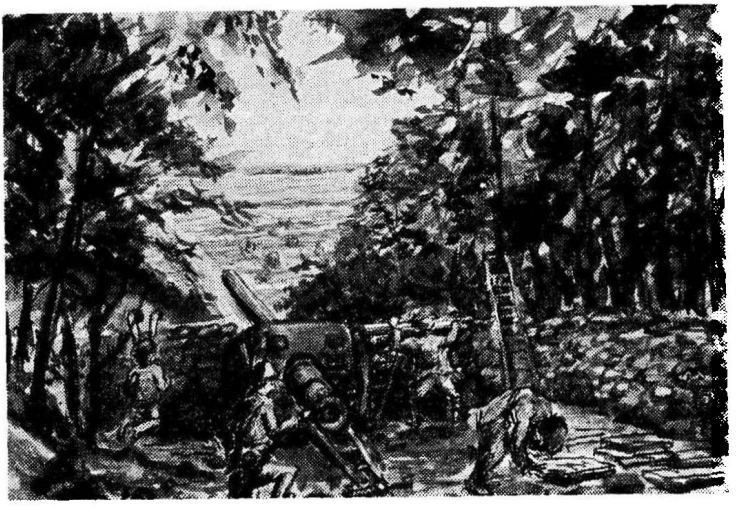
Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害となりますので，その場合にはあらかじめ小社あて許諾を求めてください

彷徨千里　目次

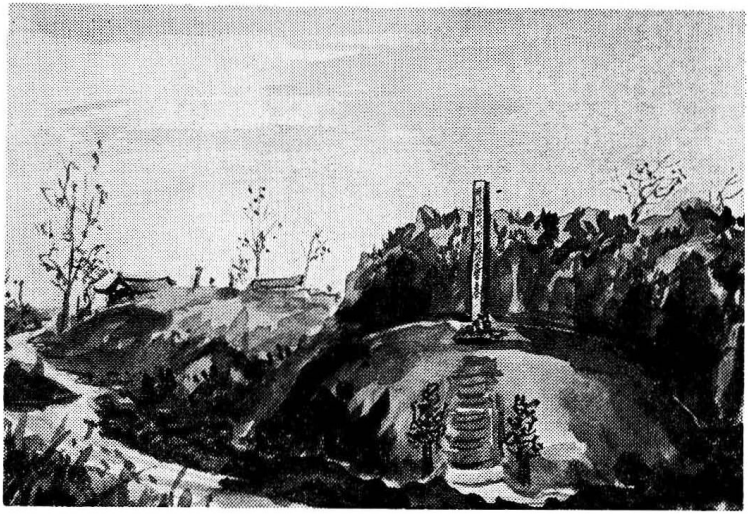
――紅軍に入った皇軍兵士の手記――

"無敵" 関東軍の最後 5
国境の突撃大隊 6
街から消えた "皇軍" 13
背後に迫るソ連戦車 20
"人間爆雷" 27
不可解な停戦命令 36
噂で知る "玉音放送" 47
流浪の旅路 61
二人の敗残兵 62
日本人難民収容所 84
二〇〇キロの難民行 92
引き抜かれた安全栓 102
朝鮮人老婆の涙 111
獄窓の青空 120

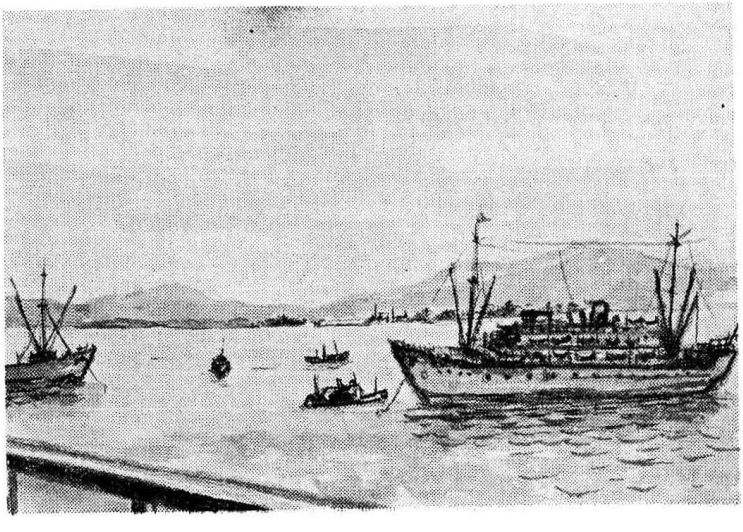


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

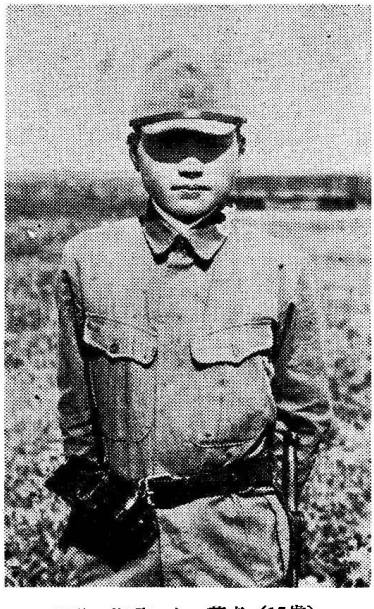
生への模索 129
薪盗りの日々 130
ソ連兵の暴行 136
神も仏もあるものか 142
現世地獄 143
中国残留孤児の原点 151
降って湧いた八路軍 156
揺れ動く心 161
取り戻した正常感覚 167
春のめざめ 174
一二〇〇高地の惨状 178
生きる 184
揺れる大陸 189
残留 190



解放軍に入る　193
突然の逮捕　201
シャバの空気　208
大山鳴動するなかで　214
〝整風〟一過　220
タドンづくり　224
急展開する戦局　228
巨大な流れ　232
あとがき　235



"無敵" 関東軍の最後



満洲の草原に立つ著者（15歳）

「……私は生きています。生きぬいて、十八年ぶりにやっと故郷(ふるさと)に帰りつきました。女房や子どもを連れて……。この村で生れ育った幼な友達や多くの先輩たちが、戦場から〝帰らぬ人〟となったと聞きました。この方々の死を無駄にしないためにも、この私の命を平和のために役立たせたいと考えます」

昭和三三年四月二六日、舞鶴から故郷の兵庫県加西郡西在田小学校前に着いた私は、出迎えの村人たちに、このように挨拶した。

その瞬間、私の脳裡に、まる十八年前の光景がよみがえってきた。同じ場所から、日の丸の旗をふり、万歳、万歳の声で私を送り出してくれた一〇〇人近くの村人と六〇〇人の小学生の顔と姿が……。私は「生きている」喜びをあらためて噛みしめるのであった。

国境の突撃大隊

「タンタカ、タンタカ、タンタカタン」ラッパの音が夜空にひびく。「点呼！」「点呼！」と、週番上等兵が叫ぶ。バタ、バタ、バタッと音をたてて、兵隊たちが兵舎内の廊下に整列。「番号！」一、二、三、四、五……。

一九四五年（昭和二〇年）八月四日の午後八時。ところは琿春（こんしゅん）。中国の東北部（旧満洲）の東南端、ソ連のシベリア地方および朝鮮と境を接する国境の街である。兵舎は、同地に駐屯している日本陸軍第一方面軍（司令官　喜多誠一中将）・第三軍（司令官　村上啓作中将）・第百十二師団（師団長　中村次喜蔵中将）・第一三一五五部隊（部隊長　西崎少佐）・第一中隊。ソ連軍戦車への肉弾攻撃決死隊として、七月に新編成されたばかりの〝突撃大隊〟である。

型どおりの点呼がすむと、週番下士官が「馬に乗れる者はおるか」と問いかけた。私をふくめた数人が「ハイッ」と手をあげた。「国田一等兵と山本一等兵は前に出よ」の声に、私は「ハイッ」と一歩前に出た。そして「明日から部隊長殿が陣地構築の下調べに、琿春北方の山岳地帯へ出かけられる。二人は馬を曳いて随行せよ」と命令された。

当時、沖縄の占領を終えたアメリカ軍は、日本本土作戦の準備を急いでいた。その手はじめとしてアメリカ軍は、まず、本土と大陸間の遮断をねらい、朝鮮海峡にある済州島に上陸するであろう、とみられていた。一方、ナチスドイツを降伏させたソ連も、連合国によるヤルタ協定に従って、ヨーロッパにあった兵力を極東に転用・集中しつつあった。

こうしたなかで、中国東北部（満洲）を占領していた日本軍（関東軍）は、その兵力の相当部分を朝鮮半島の南部と日本本土に送ると同時に、主力を長白山脈の山中にある通化に移した。これは戦線を縮小（北満、西満、東満の広大な地域を捨てる）して、ソ連軍の進攻に備えるための作戦であった。その一環として関東軍は、同年五月ごろから〝倉庫作戦〟の名のもとに、ソ満国境地帯に急ごしらえの〝陣地〟〝要塞〟を構築する作業をすすめていた。したがって、それを守る兵隊の役割は、関東軍

主力部隊が通化に強固な陣地をつくるまでの楯。ソ連軍の進撃速度をにぶらせるための、時間かせぎの〝捨て石〟であった。

しかし、一兵卒の私たちは、そのような情勢と自分たちのおかれている位置を知るよしもなかった。

翌五日早朝、各中隊から選ばれた六人の兵隊は、西崎部隊長ら数人の将校とともに兵舎を出た。私たちは部隊長の身を守る護衛兵であった。同時に、将校の乗った馬を曳き、食糧を満載した荷車を曳く馬の御者であった。部隊長というものは、ふだんはそばに近よることすらできない〝雲上人〟であった。この〝雲上人〟と行をともにする〝光栄感〟とともに、久しぶりに窮屈な兵営から出る〝解放感〟による〝たのしさ〟で、心はうきうきとしていた。

一行は、琿春市街からソ連との国境に沿って春化につうじる道路を東へ進み、馬適達（ばてきたつ）という部落から北に折れて、谷間に入り周囲を土壁で囲んだ朝鮮人部落で一泊した。農家の一室を宿舎にあてがわれたが、われわれ兵隊は、一晩中交替で歩哨に立たねばならない。

実弾をこめた小銃をかまえて歩哨に立っていると、突然、朝鮮人青年たちの歌声がきこえてきた。歌詞が朝鮮語のため意味はわからないが、節は日本の軍歌である。真夏とはいえ、谷間の夜はひんやりとして、肌寒さをおぼえる。雲ひとつない夜空にはキラキラと星が輝く。もの音ひとつせず、シーンと静まりかえった真暗闇である。

それだけに、夜空にひびきわたる歌声には、なんともいえない憎しみ、怨念がこもっているように感じられた。背すじの寒くなるような不気味さが、ひしひしと迫ってくる。

いまにして思えば、国境からわずか数キロしか離れていないこの地の住民は、すでに数日後にひか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

えたソ連軍の進入予定を知っていたのかもしれない。知らなくても被圧迫民族としての第六感（本能）で直感していたのではなかろうか。

翌六日朝、私たちの一行は谷間を奥へ奥へと入っていった。

うっそうと茂る林にはさまれた山道にさしかかる。急傾斜の山肌を縫うように曲がりくねった山道。馬車一台がやっと通れるぐらいの小道である。私の曳く馬車には、米九〇キロ入りの麻袋がうずたかく積まれている。石ころだらけの坂道の曲り角にさしかかる。荷がゆるんでグラグラッと低い方に傾く。へたをすれば人馬は荷車もろとも千尋の谷に落ちこむことは必至だ。何回も何回も荷綱を締め直す。

ブーンブーンと大きさが親指ほどもある馬虻が馬車の周囲にまとわりつく。ひとたび馬にとりついて血を吸い出すと、死ぬまで離れない。何十匹何百匹も吸いつくと馬が死んでしまうという恐ろしい奴だ。私たちは手にした竹箒を振るって、馬の背からこいつを払いおとさなければならなかった。

峠を越えた一行は、昼なお暗い原生林にかこまれた渓谷を東南へとすすむ。まもなく大荒溝に着いた。山林労働によって生計を営んでいる朝鮮人部落である。私たちは宿舎にあてられた民家に入った。裏側にあるベランダのすぐ下は大きな滝。幅一〇メートルもある川全体がこの地点で滝となり、白いしぶきをあげて七、八メートルも下の滝壺に落ちこんでいる。

山菜料理を肴にコップ酒をぐいっとあおって眠りについたが、滝の音がうるさくて寝つかれない。それに、どしゃ降りのにわか雨の音も加わる。洗面器の底を叩きつけるようなものすごい音だ。山深い谷間だけに雨もはげしいのであろう。

翌八月七日の朝は、前夜の豪雨を忘れたかのように、カラッと晴れあがった好天気。キラキラ光る朝日が映えて緑を鮮やかに浮彫りにする山々。兵営内外の殺風景に慣らされた私たちにとって、このうえなくすばらしい光景であった。部隊長と将校らは、陣地予定地の視察が一応おわったもようで、さきに出発。あとは、隣の中隊の桑田伍長を班長とした兵隊数人が、二台の馬車を曳いて、谷間を川下へ川下へと歩いた。

渓流の東側は屏風のようにそそり立つ険しい山。岩肌のさけ目から顔を出した形のよい小松やツツジの赤い花、白い花。誰かが言った。「おれの田舎とおなじだ」。私も馬の手綱をにぎりしめながら、ふるさとの山河に思いをはせた。父や母、兄と弟や妹、祖父母などの顔がうかんでは消えた。ああ、もう生きてふたたび会うこともないだろう。久しく味わったことのない感傷にひたりながら歩きつづけた。

だいぶおなかがすいてきた。「昼めしにしようか」と言い出したのは、隣の中隊の情野(せいの)。眉が秀でたキリッとした顔つきの男で、ズウズウ弁が特徴。私と同年兵でやっと一等兵になったばかり。いわば新兵に毛の生えたような存在。しかし「休憩しよう」とか「メシにしよう」など思ったことをズケズケと言う。ちょっと神経質のようだが、いわゆる〝模範兵〟型ではなく〝話のよくわかる男〟で、好感がもてた。

これが情野三二との出会いである。もちろん、八月五日の朝いらいずっといっしょであった。しかし記憶にはっきりと残っているのは、このときからである。彼にとっても、私についての記憶は、このときが初めてだったかもしれない。

密江で豆満江に合流する川に沿って、一行は南へ南へとすすんだ。途中から川岸を離れ、丘の斜面にのびた道に入る。日本軍がさかんに道路拡張工事をしていた。たぶん、山岳地帯に構築中の陣地（要塞）につうじる道路であろう。丘を越えると琿春の西一二キロにある訓戎（くんじゅ）が見えた。訓戎は、豆満江をへだてて朝鮮と境を接する要衝、いわば琿春の玄関口である。

うす暗くなった道を私たちは、馬を曳いているのか、馬に曳かれているのか、わからない調子で、つかれはてた重い足をひきずりながら、琿春へと急いだ。兵舎にたどりついたのは夜九時の点呼まえであった。引率責任者の桑田班長は、解散にあたって「ご苦労であった。明日は外出だ。みんな早く寝ろ」と言った。一〇か月まえ入隊していらいはじめての外出だ。明日への期待に胸をふくらませながら、眠りについた。

翌八月八日午前九時。「外出腕章」をつけた私は、気の合った同年兵三、四人とともに営門を出て市街地に向かう。街のなかは何を見てももの珍しい。牢獄のように自由のない軍隊から〝解放〟されたひとときである。まるで籠の鳥が解き放たれて大空にとび立ったかのような気分だ。

目抜き通りには日本人の商店も多い。私たちはある文具店に入り、ノートなどを買った。そのとき店のフロントで、客にたいしてきぱきとした態度で応対していた娘さんの面影が妙に印象にのこった。二〇歳ぐらいか。顔つきはちょっときついが理知的で勝気そうな娘である。この娘が一年後、私がこの琿春でいっしょに暮し、仕事をしたときの同僚・山内君の妻となる人とは……。神ならぬ身、知るよしもない。

街のなかを歩くと、日本人の料亭や厚化粧の芸者の姿があちこちで目につく。そこには白昼からよ

っぱらい、馬鹿騒ぎをしている将校や憲兵、そして事業家らしい日本人がうようよしている。私は、おれたち兵隊とくらべてちがうもんだなあ。沖縄では戦友たちが〝玉砕〟しているというのに、と思った。うらやましいというよりも、なんともいえない腹立たしさを覚え、腐敗の度をつよめる日本軍の恥部を見たような気がした。

私たち兵隊は、うどん屋でコップ酒を一杯呑むのがせいいっぱい。町のあちこちで憲兵隊員や巡察将校の姿を見かける。外出中のわれわれ兵隊に監視の目を光らせている。私たちは「外出」は「自由」時間と思っていたが、じつは「自由」でもなんでもなく、兵営の延長であった。映画館の前には、長谷川一夫主演の映画『雪之丞変化』の看板があった。しかし、入ることはできない。午後五時の帰営時間に一秒でもおくれると、〝営倉入り（兵営内の監獄）しなければならない〟と、くりかえし脅かされていたからである。門限の一〇分前に兵舎に帰りついて初の外出はおしまい。なんとなく期待はずれのものたりぬ思いの外出だった。

夕食時も、初の外出の興奮が覚めやらず、話の花が咲く。すると古兵たちがどなった。「おまえら外出させてもらって、たるんどるのか。明日からいままでの倍以上しぼりあげるぞ」。

午後九時、消灯の直前である。突然「非常呼集」「非常呼集」の叫びが兵舎内にひびく。「なにごとか」と、急拠武装をととのえた私たちは廊下に整列した。中隊長は「アメリカのB29が奉天、鞍山方面だけでなく、北朝鮮の清津あたりまで羽をのばしてきた。それだけでなく、ソ満国境のソ連軍の動きも、ここ二、三日ただならぬものがある。まさに一触即発の情勢だから、いつでも出動できるよう、ただちに態勢を整えよ」と命令した。

私たちはすぐ、背のう（リュック）のなかに着替えや日常品を入れ、外套をまき、水筒、雑のうを整備した。今日の外出のとき、修理に出すのを忘れていた腕時計も封筒に入れ、雑のう（掛けカバン）の奥ふかくしまいこんだ。小銃や剣をみがき油をぬって、就寝したのは夜中である。

街から消えた"皇軍"

ウトウトと、何時間ねむったのであろうか。突然、ラッパの音が鳴りひびいた。それにまじって「非常呼集」の叫び声がとぶ。私はハッととび起きた。フトンをたたみ、服を着て軍装をととのえ、小銃をひっさげて中隊の前庭に整列した。もちろん洗面の暇もない。

外はまだ真暗闇であった。午前一時半か二時ごろであろう。「非常呼集の演習か？」と思ったが、どうもそうではないらしい。重くるしく緊迫した雰囲気が営庭を覆っている。真夏というのに背中がぞくぞくするようなうすら寒い朝である。広場の正面には中隊長以下、将校たちが並んでいる。

中隊長が沈痛な声で報告した。「本日午前零時に、ソ連軍が五家子付近の国境線を越えて、満洲国内深く侵入してきた。まもなく五家子の国境守備隊からの連絡はとだえた。全員玉砕したものと思われる」。そして「わが中隊は、部隊長殿の命令により、ただちに琿春河を越え国境に向かう」と命令した。いよいよ来るべきものがきたのだ。各自に小銃実弾が百発ずつ渡された。カーキ色の麻布でつくった弾帯を肩にかける。ずっしりとした重さが身にしみる。

そのさなか、上空からヒューンヒューンと不気味なうなりごえが聞こえた。その瞬間、はるか後方

で、ドカンドカンという爆発音がする。ソ連軍の長距離砲の炸裂音だ。国境から、われわれがいる琿春市街地の上空を越えて、はるか西方の日本軍主力陣地を砲撃しているのであろう。国境からわれわれの兵営までは十二、三キロ。兵営から主力陣地まで十二、三キロの距離だから、ソ連砲の射程距離は二十四、五キロはある。われわれの常識をはるかに越えたソ連砲の威力である。「いよいよ戦闘が始まった」という実感が、ひしひしと身にせまる。

私たちはかけ足で営門を出る。うす暗い市街地を通りぬけ、国境方面へと急ぐ。市街地は死の街のように静まりかえっている。暗いので他の中隊や他の部隊のうごきはよくわからない。兵営から二キロほど東を流れる琿春河の橋のたもとまでくると、ようやく周囲がほのぼのと白んできた。この道を国境線へ向かっているのはわれわれの中隊だけである。みんな黙々と歩く。「とうとうはじまったのか……」言葉も出ない。

幅二、三百メートルもある琿春橋をわたった。そこから数百メートル前進して、停止命令が出た。「道路わきの畑のなかにタコツボを掘れ」との指示である。国境から進入してくるソ連軍をここで迎え撃て、というのだろう。

手渡されたシャベルで塹壕を掘っていると、さあ、これからいよいよ戦闘だ、いう実感がわいてくる。このとき、誰かが大声でどなった。「これからは戦争だぞ。いままで偉そうにしとった奴は、どっちからタマがとぶかわからんぞ。用心しとけ」。ひきこまれたように私らも同じ文句を叫んだ。初年兵として、いままでいじめられどおしで、やっと二年兵になって〝さあ、これから楽しよう〟と思っていた矢先に、戦争になってしまった連中の叫びだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com